

平成10年度 調整班研究報告

A01「原典」

報告：研究代表者 池田 知久

第1回調整班（「原典」班）会議

日 時：平成10年11月1日（日）午後5時～8時

場 所：学士会館本館（東京都千代田区一ツ橋）

出席者：五味文彦教授・高橋孝信助教授・池田知久教授・緒方英子囑託職員の4名

審議事項：

1. 各研究分担者の「計画研究」の紹介とそれを総括する共通テーマの設定
2. 「原典」班会議の今後（平成10年度）のスケジュール
3. 「原典」班の平成10年度予算

決定事項：

1. 総括的な共通テーマについては、「過去半世紀間に進展した各分野（中国、日本、南インド・タミル、チャガタイ・トルコ、ペルシャ等）における古典学を各分野で総括するとともに、諸分野全体に対しても大局的な総括を行い、その中から新たな古典学の方角を見だしていく」ことを中心とする、「研究計画調書」の「研究目的」を承認した。
2. 今後（平成10年度）のスケジュールについては、平成10年度内にさらに2回、「原典」班会議を開催する計画を承認した。
3. 予算については、「原典」班の平成10年度分担金100万円の使用内訳を承認した。

第2回調整班（「原典」班）会議

日 時：平成11年2月18日（木）午後2時～6時

場 所：ホテルグランヴィア京都（京都市下京区烏丸、京都駅前）

出席者：五味文彦教授・高橋孝信助教授・御牧克己教授・間野英二教授・池田知久教授の5名

審議事項：

1. 平成11年度以降の「原典」班会議の持ち方
2. 平成11年度以降の「原典」班としての活動計画、同予算案
3. 平成11年度以降の各研究分担者の「計画研究」の紹介

決定事項：

1. 「原典」班会議の持ち方については、E MAILやFAX等の手段を活用しつつも毎年2、3回の会議を開催して、上記の諸「研究目的」を達成するために努力することを決定した。
2. 平成11年度以降の活動計画については、「各分野における原典の置かれた状況を研究分担者が相互に理解しあう」ことを出発点とする、「研究計画調書」の「研究計画・方法」を承認した。

同予算案については、毎年150万円の研究経費、及びその使用内訳を「研究計画調書」とのり承認した。

A02「本文批評と解釈」

報告：研究代表者 関根 清三

本調整班は、第1回調整班合宿会議を、98年11月27日 29日鎌倉で、第2回会議を12月27日京都で、それぞれ開催した。来年度から始まる計画研究について、各参加者の課題と展望が報告され討議された。佐藤氏は「初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的研究」をめぐって、特にコンピューターを駆使して彩色した福音書共観表の作製を目指し、丸井氏は「インド哲学における聖典観の展開」をめぐって、パラモン哲学諸派のヴェーダ聖典に対する態度の究明を目標とし、関根氏は、「旧約聖書の本文批評と解釈」について、歴史的批判的解釈学と哲学的解釈学両方に開いた方法論を模索しつつ、特に預言者の研究と翻訳へのその適用を課題とすることが確認された。興善氏の「六朝期の著作における伝統の継承と変容」をめぐる計画研究についても、書面での報告があり、紹介された。今後公募研究者が決定した段階で、1年目はそれぞれの分野の研究状況を報告討議しあい、2年目以降、何らかの共通のテーマを掲げて共同研究を進めることが確認されている。

A03「情報処理」

報告：研究代表者 徳永 宗雄

「情報処理」調整班では（1）総括班事務局の指示のもとに本特定領域研究電子広報に関わるインフラストラクチャを構築すること、（2）古典文献電子化の推進と、古典学へのコンピュータの有効利用の促進を主要課題としている。

まず（1）については、本調整班班長徳永研究室のサーバが稼働を開始し、本研究Webページが開設されている（<http://www.kotengaku.bun.kyoto-u.ac.jp>）。

今後、本特定領域研究に関わる電子広報はすべて、このサーバから発信される予定である。なお、京都大学文学研究科WebページのフロントページからこのWebページにリンクが張られ、「古典学再構築」プロジェクトが広く世間に知られる環境が整った。今後このページには、東京大学文学研究科、神戸学院大学のサーバからもリンクが張られることになっている。

（2）については、上記サーバにanonymousftp siteを設け、古典文献デジタルテキストを順次公開していく予定である。

近日中にインド二大叙事詩『マハーバーラタ』『ラーマヤナ』のデジタルテキスト（世界初）と、今年度調整班活動の一環として入力した『アイタレーヤブラーフマナ』（リグヴェーダ派の主要なブラーフマナ文献の一つ）の電子テキストを公開する予定である。

本調整班の性格上、調整班メンバーとの意見交換はもっぱら電子メールで済ませており、特にそのための会議は予定していない。

A04「古典の世界像」

報告：研究代表者 内山 勝利

12月の全体会議および第1回シンポジウムの折を始め、複数の当調整班員が会する機会のあるごとに、意見交換と今後の運営方針などの検討を重ねてきた。その過程で、当面の共同基礎作業として、次の二つのテーマについて議論するとともに、各分担者がそれぞれの分野ごとに取りまとめを試み、今年度内にレポートを作成することとした。それらはパンフレットとして纏め、また順次「ニュースレター」などに掲載していく予定である。

1. それぞれの古典世界は、どのような 学 の理念をもっていたか、そして、それ(ら)をどのような 学問体系 ないし プログラム として展開していたか。
2. それぞれの古典世界における異文化理解のあり方、異文化との接し方は、その需要および排除の動向を含めて、どのようであったか。

今後の共同研究のテーマとしては、

1. 国家および宗教についての考え方、特に両者の関係の比較的考察
2. 自然観と技術論、特にエコロジー的観点からの比較的考察
3. 言語論、思想における言語の役割についての比較的考察
4. 時間論・空間論の再検討
5. 古典的「理性」・古典的「合理性」の再検討と復権の可能性

などが想定されているが、はじめての総合的な研究の試みを効果的に遂行するべく、多様な古典世界を共通の基盤にのせて、真に有意義な比較・総合を行いうる方法を開くための糸口として、上述の作業を進めている。その取りまとめを踏まえて、来年度は、さらに調整班会議の場で議論を重ねながら、パンフレットの作成、個別的成果の公表を行うことを予定している。

B01「伝承と受容（世界）」

報告：研究代表者 江島 恵教

本調整班では、種々の形の打ち合わせを通じて、従来等質なものとして固定化されがちであった「ヨーロッパ文化」「アジア文化」といった「文化的統合体」を一旦解体した上で、

- (1) 古典の「伝承」過程そのものを具体的歴史的事実に即して分析しなおし、
 - (2) 古典が異文化圏において「受容」される過程を文化横断的に考察し、
 - (3) それを通じて、一般性・普遍性をもった新しい「古典学」を再構築すること、
- を研究目的とすることが確認された。

B02「伝承と受容（日本）」

報告：研究代表者 木田 章義

平成10年度は、5月から月に二回ほどのペースで調整班員と研究分担者が集まり、意見の交換を続けた。そして、平成11年度以降は、日本分野の研究の柱を中世とし、五山文化では五山僧の活動とその著作、キリシタン文化では資料の整備を中心として研究を進め、朝鮮資料も資料整理からやりなおしてみる結論に達した。キリシタン文化は米井力也が中心となり、朝鮮資料は木田章義が中心となるが、五山文化については、公募研究の決定を待ち、主担当者を定め、その後は、計画研究の研究代表者・研究分担者だけでなく、公募研究の研究代表者・研究分担者を含めて拡大調整班を組織し、年に数回の調整会議を開き、できれば、夏休みには研究会・意見調整会を開催することとした。

B03「近現代社会と古典」

報告：研究分担者 月村 辰雄

古典テキストが近現代社会でどのように読まれ、どのような役割をはたしてきたのか、多方面から検討・考察を加えるのが、本調整班研究の目的である。5名の計画研究代表者は、それぞれの研究計画を練り上げると同時に、相互に連絡を取り合って調整班としての研究計画の策定に当たり、平成10年12月の調整班会議において、1) 古典の研究・伝承システムの社会的特性、2) 古典受容の新展開期の諸問題、という2つのテーマを軸に個々の計画研究を進める方針を確認した。これをもとに個々の計画研究においては、1) のテーマに関して、中世におけるアリストテレスの著作、ルネサンス期から近世に至る修辞学、近世および近代初頭にかけての百科全書派という、それぞれの時代における代表的な学問・思潮を手がかりに、古典の役割が考察される。また2) のテーマに関しては、ルターの宗教改革とイランの近代的国民意識形成を2つのモデルケースとし、『聖書』以下のキリスト教の古典、ないし英雄叙事詩『シャー・ナーメ』の読み方の新展開がもたらした社会的意味が考察される。